論 文 審 査 の 要 旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	小松 拓実
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題　目　Trends and Changes in Endoscopic Management and Clinical Outcomes of Colonic Diverticular Bleeding during the Coronavirus Disease-2019 Pandemic （コロナウイルス感染症2019パンデミックにおける大腸憩室出血の内視鏡管理と臨床転帰の傾向と変化）
	掲載誌 Journal of the Anus, Rectum and Colon 2024;8:403-410.
	主査　國島　広之 副査　竹村　弘 副査　西根　広樹

［論文の要旨・価値］急性下部消化管出血の中で最も多い原因である大腸憩室出血(CDB)は、緊急内視鏡を含む早期の治療介入が行なわれるものの、COVID-19 流行時には感染症対策の観点から内視鏡診療に大きな変化がみられた。本研究は COVID-19 流行時の CDB 患者の内視鏡管理と臨床転帰に関して、2つの三次救急医療機関で実施した後ろ向きコホート研究である。2017 年 4 月～2023 年 3 月に血便を主訴に来院し CDB の診断で緊急入院した 2017 年 4 月～2020 年 3 月（流行前）213 例と 2020 年 4 月～2023 年 3 月（流行期）175 例を対象とした。Propensity Score Matching（PSM）を用いて流行期と流行前における群間差の調整（1:1）を行った 132 組の症例が抽出された。年齢中央値は 77.0 歳、男性 183 人、女性 81 人であった。PSM 後の流行期では、来院から下部消化管内視鏡までの時間（中央値）は流行前より有意に長く（20.0 時間 vs. 12.0 時間、P ＜ 0.01）、来院から 24 時間以内（63.6% vs. 76.5%、P = 0.03）ならびに、勤務時間外（23.8% vs. 47.7%、P ＜ 0.01）に実施された下部消化管内視鏡は有意に少なかった。臨床転帰は流行期と流行前で、30 日以内の再出血率は 28.0% vs. 32.6%（P = 0.42）、30 日以内の死亡率は 0.8% vs. 0%（P = 0.96）、IVR 施行率は 6.8% vs. 3.8%（P = 0.28）であり、両群で統計学的有意差は認めなかった。COVID-19 流行期における内視鏡管理の変化は、CDB 患者の臨床アウトカムに影響を及ぼさなかった。全ての CDB 症例に緊急内視鏡を行うのではなく、緊急性の高い症例を選択して内視鏡を含む緊急止血処置を行うことは、内視鏡医を含む限られた人的医療資源の適切な配置を含め、CDB に対する妥当な治療戦略であることが示唆された。

［審査概要］審査は主査、副査 2 名および 4 名の陪席のもと行われた。プレゼンテーションおよび質疑応答が行われた。審査のなかでは、1. パンデミック期やその他の内視鏡との相違、2. 憩室部位やリスク因子との関連、3. 重篤例の有無など多岐にわたる質問が行われ、申請者は真摯かつ的確に回答した。

最 終 試 験 結 果 の 要 旨

［研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価］背景から考察まで大変分かりやすく練られた構成の発表であり、申請者は本研究に関する幅広い知識・学識を有すると判断した。研究発表、質疑応答を通じて真摯な態度に終始し、誠実で大変礼儀正しく、学位授与に値する人物であると判断した。英語読解力は英文文献の一部を指定し、その場での和訳により十分な読解力があると判断した。